

マルクスの両親

岩 淵 慶 一

はじめに

カール・マルクスの父親のハインリヒ・マルクスは1782年4月15日にユダヤ教のラビの家庭で生まれた。その祖先は、トリーアで代々ラビを勤めてきたといわれている。彼は1814年11月22日に、オランダのユダヤ人の家庭で1788年9月20日に生まれたヘンリエッテ・プレスブルクと結婚している。この母親の家系にもラビが多いそうであるが、興味深いのは、この家系を溯ると有名な詩人のハインリヒ・ハイネの祖先や、現在のオランダの大企業フィリップスの祖先も登場し、彼らとカール・マルクスが遠い親戚あるいはやや遠い親戚であったことがわかることなどであろう。結婚以来マルクス夫妻はトリーアに住み、この街で9人の子供が生まれている。長男は僅か3歳半で亡くなってしまったので、長女の次に、1818年5月5日に生まれた次男のカールが実際上の長男として育てられることになる¹⁾。

このカールにたいする父親の影響については従来からかなりよく知られていて、若きカールについて論じている論文や著書などでは必ずといってもよいほどこの影響が論じられている。しかし、マルクスの研究者が社会科学、とりわけ経済学の研究者が多かったせいか、この影響が必ずしも適切に捉えられてきたわけではなく、本格的な研究はまだこれから先の課題だといっても過言ではないように思われる。また、どこの家庭でも幼い子供にたいする母親の影響は大きいが、ユダヤ人の家庭は母親の王国であって、子供は母親の圧倒的な影響

下でその人格の基本を形成することになるといわれている。したがって、マルクスの幼少年時代を考えるとということであれば、何よりもまず、彼の母親のヘンリエッテについて知らなければならないはずである。ところが、この母親についてのこれまでの議論に目を向けてみると、研究の状態は父親の場合よりもさらに悪く、いわば惨憺たるもので、すべてはこれからだといってもよいことがわかる。そこで、以下、先ず最初にこの母親について、従来の通説を思い起こしつつ、やや立ち入って考察し、そのあとで父親について分析を深めるよう努めておきたい。

1 ヘンリエッテ・マルクス

マルクスが並外れて優れた業績を残した文字通りの天才であったとすれば、当然、その母親が家庭内での教育において優秀であったのではないかと考えてみなければならないであろう。しかし、何故か彼女にたいする評価はマルクス研究者たちのところではけっして高くない、否、それどころか、きわめて低いのである。たとえば、古いところではフランツ・メーリングが彼女について、「夫や子供たちのために万事やさしく心を使い、家庭の平穩にひたすら打ち込んだ」と特徴づけたあとで、「息子の立身出世を気遣いこせこせと思い患っていた」などと書き²⁾、よく知られた最近のカトリック系の研究者の一人、デイヴィッド・マクレランはヘンリエッテを、「単純で教養のない勤勉な女性で、その視野はほとんどまったく彼女の家族と家庭に限られ、神経過敏で愚痴っぽく、ユーモア味に欠けた説教好きの人物」などというように描き出している³⁾。これは、勤勉だけがとりえで、とても優秀とはいえない、無教養で視野の狭い非常に不快な母親であったという評価である。だが、はたして彼女はそれほどひどい女性であったのであろうか。

今日残されている僅かな資料は、故郷のオランダではイーディシュを使っていたとみなされているヘンリエッテが書いた語学的に正確とはいえず、あまり句読点もない手紙である。おそらくドイツ語で話すのも文章を書くのも苦手だっ

たせいであろう、手紙の文章の量はきわめて少ない。したがって、説教好きということが文章が多めになることを伴うものであるとすれば、彼女はそうした条件を欠いていたので、そもそも彼女が説教好きであったなどという証拠はないということになる。もちろん、母親として当然のことであるが、たしかに現存の手紙には多少説教がましいところもないわけではないが、それらの少ない文章群は、彼女が何を考えていたかをよく伝えていて、彼女についての低い評価が適切ではないことを明確に示しているように思われる。

最初に見ておきたいのは、カールがボン大学に入学してからしばらくして彼女が息子宛に書いた手紙である。彼女は、簡単なまえおきの後に、離れて暮らすわが子に親ならば誰でもが書いておきたいと思うようなことを、次のように興味深く記している。

「あなたがあなたの小さな家政 [Haushaltung] をどのように調整しているかを私が知りたがっているとしても、私たち女性の弱点だなどとみなすことはできません。エコノミーもまた主要な役割も演ずるものですが、それは大きな家政においても小さな家政においても不可欠な必要事なのです。このさい私は、愛するカール、あえて注意しておきますが、清潔と整理をけっして小事とみなしてはいけません。というのは、まさにこのことに健康と快活とは依存しているからです。あなたの部屋がたびたび掃除されるように、きちょうめんに心がけなさい——そして、愛する私のカール、毎週スポンジと石鹸で洗いなさい——。コーヒーはどうしていますか。それをあなたがつくっているのですか、それとも、どうなっているのですか。私は、家政にかんすることはすべて伝えてもらいたいのです。あなたのやさしいミューズ [詩歌の女神] も、あなたの母親の散文によって侮辱されたとは思わないでしょう。彼女には次のようにいいなさい。より低きものによってより高く、よりよきものは達成されるものなのです、と。」⁴⁾

たしかに多少うるさい母親のようにみえるところがないわけではないが、家政においてはその大小にかかわらずエコノミーが主要な役割を演ずるという主張や、健康と快活が清潔と整理に依存しているという主張も、さらに、より

高い欲求が達成されるためにはより低い欲求が達成されていなければならないという主張も、つまらない説教などではないであろう。ヘンリエッテは論拠になるような一般論を挙げながら議論をしているのであるが、これは、いうまでもなく、教養の無い人の態度ではなく、明らかに教養のある人の態度なのである。それに、カールの日常生活の乱れが詩作の情熱に振り回されていることからきているのをよく理解していて、ミューズの気分を問題にしながら論じているところなどは、神経質でユーモアの欠けた説教好きの議論などではけっしてないであろう。むしろ、逆に彼女が、カールの弱いところをユーモアを混ぜながら突いていて、賢明で教養のある母親であったことを示しているのではないであろうか。

ここから浮かんでくるイメージは、先に引用した研究者の見解とは逆に、ヘンリエッテが、視野の広さはともかくとしても、わが子にたいする愛情にあふれていて、わが子の健康に気を使っていただけではなく、教養もありユーモアも解する知性をもった母親であったということであろう。それからまた、その大小に関わりなく家政においてはエコノミーが主要な役割をはたすという主張などは後のカールの重要な思想に通じるようなところもあり、ヘンリエッテになかなかの洞察力があったことが示されているとみなしてもよいのではないであろうか。

ここで引用した文章のなかでもヘンリエッテがカールの健康に気を使っていることがよくわかるが、その他の手紙をみると、この健康について彼女が、注目するだけの価値のある興味深い見解を抱いていたことも知ることができる。カールあての手紙の一つで彼女は「具合の悪さをひどくするようなことはすべて避けなければならない」と書き、具体的にどのようなことをしてはいけないかをあれこれと指示した後に、「私がドクターのまねをするなんておかしいでしょう」と書いて、さらに次のように付け加えている。

「あなたは、あなたたち子供たちが健康ではないときに両親がどんなに悲しいものか、またそれが私たちにどんなに多くの悲しい時間を生んできたかを知りません——あなたたち子供たちが道徳的および肉体的に [Moralisch und

Körperlich] 健康を維持してほしただけで、その他のことは気にもならないのです。』⁵⁾

たんなる健康だけではなく、つまりたんに身体的な健康だけではなく、道徳的な健康も考えていて、子供たちがそれらの二つの面での健康を維持していれば、両親にとってはもうそれで十分なのだということであるが、まことに興味深い見解ではないであろうか。身体健康だけではなく、道徳的な健康も、つまり良心についても配慮している母親を教養のない女性だとみなすことができるであろうか。ここで引用した一文は、それだけでも、ヘンリエッテにたいするマルクス研究者たちの低い評価が訂正される必要があることをはっきりと示しているのではないであろうか。

ちなみに、そもそもユダヤ人が健康と衛生の観念を特に発展させていたことや、それがキリスト教徒たちによってユダヤ人迫害の理由にされたことさえもあったことなどは、よく知られているが⁶⁾、それだけに彼らは子供の健康には非常に気を使っていた。この点では本当に説教好きなのはおそらく父親のハインリヒの方で、カールがあまり具合がよくないと書いてきたときなどは繰り返し健康の重要性を語り、「病身の学者ほどあわれなものはない」とくりかえし説いている。説教がましいといえ、こちらのほうがはるかに程度が上であることは明らかであり、それにくらべれば、ヘンリエッテの方があっさりとして書いて、しかも説得力もあったといってもよいであろう。しかし、さしあたって注目すべきは、健康について論ずるさいに、ハインリヒがカールに向かって健康は「良心 [ein gutes Gewissen] の次に [nach] 人間の最高の財産」であると書いていることである⁷⁾。最高の財産、それも第一位の最高の財産として挙げられているのは良心であり、何よりもまず道徳的な健康が強調されているのである。アクセントの置き方に多少の相違があったとしても、この思想が母親のものと一致していることは明らかであろう。こうした思想がユダヤ教の伝統とどの程度関連していたのかは定かではないが、カールは本当によき両親をもったものだといわなければならないであろう。

さらに、ヘンリエッテの手紙のなかには、彼女が感情と知性との関係をどの

ように考えていたのかについて興味深く語っている箇所がある。ハインリヒの病気がますます深刻になってきていた1838年の2月に、彼女は、「善良なお父さんが大変弱っています」などということをカールに伝えながら後に次のように書いている。

「私は、あなたが復活祭に帰ってこないようなので、たいそう不満です。私は感情を知性よりも優先させます、そして、愛するカール、私は、あなたがあまりにも理性的過ぎることを残念に思っています [ich bedaure lieber Carl das du zu vernünftig bist]。あなたは私の手紙をものさしにして私の心からの愛情をはかってはいけません。多くを感じていても、ほとんど何もいうことができないときがあるのです。ではさようなら、愛するカール。すぐにあなたの善良なお父さんに手紙を書きなさい、それはきっと早く回復するのにききめがあります。』⁸⁾

ヘンリエッテは、息子を愛していた父親の病気がますます重くなってきていたときに、戻ってこようもしない息子にたいして失望し遺憾の意を表明しているのであるが、これらの文章もまた、それらの文章の著者を低く評価することが間違いであることをはっきりと示している。ハインリヒの病状が深刻になっていたことを考慮するならば、これらの文章を書いた著者を神経過敏で愚痴っぽい無教養な女性とみなすことができるなどということは、ユダヤ人女性にたいする偏見のおかげでまともな評価ができなくなってしまった狂信的なキリスト教徒のような研究者でなければ不可能だとみなしてもよいのではないか。

興味深いのは、ヘンリエッテが状況が状況なのであえて感情を優先させると宣言しつつ、カールが他方の理性の方にあまりにも大きな重みをあたえて、バランスを崩してしまっていると批判していることであろう。彼女は、ものを考えて判断を下すさいには、理性と感情がバランスを保ちつつ一緒になって一つの全体をなしていなければならないと考えていたのではないかと思われるが⁹⁾、もしその通りであるとすれば、彼女は単純でないだけではなく、なかなか深みのある思想をもっていて、教養の水準も相当高かったとみなさなければならないであろう。

ヘンリエッタが書いた文章で現存しているものは、さらに彼女がなかなか優れた観察力ももっていたことなどを示しているが、もはやこれ以上は立ち入る必要はないであろう。すでに以上から、マルクス研究者たちの低すぎる評価とは違って、実際のヘンリエッタが家族にたいする愛情が豊かで、教養の水準も高く、ユーモアを解する知性も備えていた優れた女性であったのではないかと考えることが妥当であるということが、十分に明らかになったものと思われる。

さて、以上で、カール・マルクスがその人生の最初の段階で強い影響を受けた彼の母親についてみてきたのであるが、彼が幼少年時代に最初の思想を形成するさいによりいっそう強く影響を受けたとみなされうるのは彼の父親である。そこで、いよいよ彼の父親のハインリヒ・マルクスについて検討しておかなければならない。

2 ハインリヒ・マルクス

カールが父親にたいしてどれほど敬愛の念を抱き続けていたかは、彼の娘のエリナ・マルクス・エーヴリングの証言などによってよく知られている。彼女は次のように語っていた。「マルクスは彼の父親に心底から愛着をもっていた。彼は父親のことを語って倦むときがなく、そしていつも、古いダゲロタイプ（金属版写真法）によって撮られた父親の写真をもっていた。」¹⁰⁾ カールと彼の父親との結びつきがどれほど強いものであったかがよく示されているが、いったいこの父親は何を考えていたのか、そしてまた彼の息子に何を伝えようとしていたのか。

ハインリヒ・マルクスは、フランス革命とナポレオンのドイツ侵略によって自由の朝を迎えたユダヤ人たちの一人であったとみなすことができるであろう。彼は、ユダヤ人解放によってユダヤ人の職業選択の可能性が広がった時期に、ベルリンおよびコブレンツで法律を勉強し、1813年には弁護士の資格を獲得していたとされている。この資格取得について異論も存在するが¹¹⁾、ともかくも1814年の初めには彼はトリーアで弁護士としての活動を開始していた。このハ

インリヒが大きな問題に直面したのは、それから間もなくナポレオンが敗退し反動的なプロイセンの支配が始まったことに関連している。ユダヤ教徒であるとするれば、弁護士の仕事を続けることができないということがますますはっきりしてきたのである。実際に1816年には、ユダヤ人は弁護士になることができないということがプロイセン司法大臣によって改めて確定されている。ユダヤ人は、ユダヤ人であり続けるか、あるいはユダヤ人であることをやめて弁護士になるかのどちらかを選ばなければならなかったのである。この問題に直面したときにハインリヒは、1816年から1817年への変わり目に、自分の論文の発表にあたって自分の名前と郷里を挙げないように求めながら、次のように書いていた。

「…残念ながら私の状態は、私が家族の父として幾分慎重でなければならぬ種類のものであります。自然が私を鎖で繋いだ宗派は、周知のように、特別に信望があるわけではありませんし、また、当地方がけっして最寛容地であるわけでもありません。」¹²⁾

さらに、次の文章はハインリヒがどれほど困惑していたか、どれほど切羽詰まっていたかを示している。

「また、私が数多くの苦難を耐え忍ばなければならず、そして私が、私のささやかな能力にほとんどまったくせがまれるようにして、ようやく、一人のユダヤ人が幾分かの才能をもち、また法にもかかわりうるということを信じようと決意することができたとするれば、私がある程度臆病になったとしても、私が悪く取られることはありえないでしょう。」¹³⁾

ハインリヒ・マルクスの苦悩がどれほど深いものであったか垣間見られる文章である。フランス革命後の世界にあってもプロイセンの基督教国家が採用していた執拗な差別政策が、才能があり品性も高かったユダヤ人のところでどのような痛ましい結果を惹き起こしていたかを伝えている。だが、さしあたって明白なことは、この差別がハインリヒにたいして改宗を迫っていたということである。結婚をしていて、すでに子供も生まれていたのに、ハインリヒには選択の余地はほとんどなかったとみなさざるをえないであろう。結局ハインリ

ヒは、トリーアでは少数派であったプロテスタントに改宗したのであるが、その時期は大体1816/1817年であったと推定されている。この改宗が、反動期プロイセンにおける民主主義の致命的な不足による不当な強制の結果であることは、これまでみてきたハインリヒの文章などからも窺われるが、その他のさまざまな証言や証拠によっても確認されている¹⁴⁾。そして、この改宗によって彼は1820年には法律顧問官に任命され、長期にわたってトリーア弁護士会の会長も務めることになる。

ハインリヒ・マルクスの改宗がプロイセン国家によるユダヤ人差別の結果であったことは疑いの余地がないとすれば、彼について、「もはやシナゴグに人間の求めるべきものはなにもなく、プロイセン国教会にいちやく身を寄せた」¹⁵⁾ などと書いていたメーリング以来の伝統にそのまま従ったり、歴史的事情を記すことなく単純に「彼はユダヤ教からプロテスタントに改宗していた」と書いたり¹⁶⁾、この改宗から推し量って、彼が「(ユダヤ的) 伝統から影響を受けていなかったことは注目に値する」¹⁷⁾ などと解釈したりするのは、やはりまったく不適切だとみなさざるをえないであろう。それらはいずれもハインリヒに加えられた重い圧迫と強制を無視したり軽視したりして、彼が内面的にもユダヤ教をいそいそと放棄してプロテスタンティズムに移行したかのように描き出し、著しく間違った解釈を提供してきたのである。そもそも「神への関係はまさに早期の子供時代の決断の成果であって、それは宗教の交替によっては何らの変化も被らない」¹⁸⁾ ということも考慮されなければならないが、実際のハインリヒについては、やはり次のように考えるのが適切だとみなされるべきであろう。

「洗礼は、ハインリヒ・マルクスにあっては——その他のすべての洗礼を受けた（あるいは無宗教になった）ユダヤ人におけると同様に——ただ外面的にだけ伝統との決裂を結果としてもたらしたにすぎなかった。というのは、内面的にはユダヤ教の決定的諸特徴は無意識的に、しかしまた明白に作用し続けたからである。」¹⁹⁾

このハインリヒが改宗後にもどれほど強くユダヤ教に自己を結びつけていた

かは、彼の家族が洗礼を受けた年月日から推しはかれうる。彼の子供たちが洗礼を受けたのは数年後の1824年8月26日で、改宗後に生まれたカールはすでに六歳になっていた。そして、最後に彼の妻ヘンリエッテが洗礼を受けたのは、さらに一年以上も経った1825年11月20日になってからであった。この間家族は相変わらずユダヤ教に結びついてたとみなさなければならないのであるが、このような事実が示しているのは、家族の洗礼が引き伸ばされ、まさにぐずぐずとおこなわれたということであり、ハインリヒ・マルクスの改宗が決して真の転向ではなかったということである。また、ハインリヒの実兄のサムエル・マルクスはトリーアのラビであったが、この兄もふくむユダヤ人親族との関係が存続したこともよく知られていて、カール・マルクスの両親が、彼らの宗教的転向にもかかわらず、ユダヤ教に深く根を下ろしていたことは、疑いの余地がないといってもよいであろう。

要するに、ハインリヒ・マルクスがユダヤ的伝統の影響を受けていなかったなどという見解が間違っていて、彼は改宗後も自己をユダヤ教と結びつけていたとみなすのが正当であるということであるが、ここでさらに問われなければならないのは、このハインリヒが一体時代のどのような思想を受容し消化しようとしていたのかということである。

この問いにたいする解答でよく知られているのは、孫娘のエリナの証言で、彼女によれば、祖父のハインリヒは「政治、宗教、生活および芸術にかんする18世紀のフランスの自由思想に染まっていた」のであり、「真の18世紀のフランス人で、彼のヴォルテールとルソーを諳じていた」のである²⁰⁾。エリナは祖父を直接的に知ることはできなかったので、このハインリヒをただちに実在のハインリヒと受け取ることができないのは当然であるとしても、今日入手可能な資料からこの言葉を直接的に裏付ける証拠を見出すことはできない。したがって、彼が18世紀のフランスの啓蒙主義者の著作を読んでいたのか否か、そしてまた、おそらくかなり読んでいたのであろうが、どの程度読んでいたのかなどということは、定かではない。しかし、彼女が聞き知っていたハインリヒが、フランス革命を導いた近代啓蒙思想に共感しそれを諸手をあげて歓迎していた

という点は、たしかにその通りであったとみなさなければならないであろう。少年のときにフランス革命が起き、フランスから始まったユダヤ人解放の波がドイツにも押し寄せてきて、この国のユダヤ人にも多大な解放をもたらした。その結果として初めて彼も法律を学び弁護士の道を歩むことも可能になったのである。ハインリヒにとってはフランスの啓蒙思想は真に馴染み深いものであったはずである。だからこそ、ハインリヒはフランス革命の思想を受け入れ、その自由と平等の思想をユダヤ人にまで拡張し、「人及び市民の権利の宣言」における宗教による差別の否定を当然のこととみなし、職業選択や移住などにおけるユダヤ人の権利の制限の撤廃のために闘い、またユダヤ人として弁護士活動ができるように大いに努力したのである。

少し前に触れた論文は彼がユダヤ人差別を批判しその廃止のために努力していたことを示しているのであるが、それは当時の遅れたドイツにおけるまさに政治的焦点の一つで、ハインリヒが時代の問題をよく見ていて、適切な仕方で議論をしていたことを示している。残念ながら反動の力が強く、生き延びるために改宗したのであるが、彼の闘いの方向が、つまりユダヤ人がユダヤ人のままで「市民の身分を得ること」が大事だという方向が適切であったことは明らかである。特にハインリヒにはユダヤ人が自分のような屈辱的な道を歩まなくても済むようにという思いが最後まであったはずである。

では、ハインリヒは民主主義の理念の徹底的な実現を要求する革命的な民主主義者であったのか。おそらくこの問いにたいして肯定的に答えることができるような時期が青年時代には彼にもあったことであろう。そして、それから長い年月を経た1830年代の半ばにトリーアの文学愛好者サークル「カジノ・クラブ」で彼が口にしていたことは、君主の「気高い心」に訴えるような穏健派の民主主義者のものでしかなかったといわれているが、それでも彼も政治的な集会に参加し、革命歌の合唱に加わったこともあったのである。しかし、年をとってから彼が書いた文章からはっきりとわかることは、彼がかなり穏やかな立憲君主制を理想としていたのではないかということである。ベルリンの大学に通っていた時期のカールに宛てた手紙のなかで、ハインリヒは戯曲創作について忠

告しながら、それが「プロイセンにとって名誉あるものでなければならず、君主国の守り神に役割を与える可能性をもつものでなければならぬ」などと書いていただけではなく、さらに次のように書き加えていた。

「今日の雑種的リベラルだけがナポレオンのような男を偶像視することができる。彼のもとでドイツ全体、特にプロイセンで、毎日、何の妨げもなしに書かれていたことをはっきりと考えてみようとした人は、本当にひとりもいなかった。彼の歴史と、彼がイデオロギーという気狂いじみた表現のもとに理解していたものを研究したものは、誰でも良心をもって彼の倒壊とプロイセンの勝利とを大いに寿いでよい。」²¹⁾

ナポレオンは非現実的思弁を嫌い、啓蒙君主的イデオロギーを馬鹿げていると考えていたが、ハインリヒは他ならぬそうしたイデオロギーを信奉していたので、ナポレオンにたいして憎悪を投げつけているのであるが、死ぬ少し前のハインリヒがラディカルではなかったことがよくわかる文章である。すでに「カジノ・クラブ」で活躍していたころにも、たとえ外面だけのことであったとしても、君主に訴えていたハインリヒは、年とともに保守化がいつそう進んだものとみて間違いではないであろう。この父親のもとにあって、幼少年時代のカールがフランス革命と市民革命の思想をどのように受け止めていたのかは定かではないが、ギムナジウム卒業論文などから推理できるかぎりでは、彼が早くから父親を越え出ていたことは間違いないように思われる。そして、ハインリヒがこの文章を書いた時にはすでにベルリンで新しい空気に触れていたこともあって、カールは、完全に父親のそうした保守主義を超えて先に進んでしまっていたことは疑いない。

市民革命思想にたいするハインリヒの態度がどのようなものであったのかはそれなりに理解できたとして、さらに問題はそうした一見プロイセン的愛国主義に彩られた思想の背後にあった彼の宗教的および哲学的な思想がどのようなものであったのかということである。すでにかかなりの年齢になってからのものばかりであるが、彼がボンやベルリンにいたカールのところに出した手紙のなかには、そうした問題に光を当てているような文章が少なからず見出される。

それらの文章を通して知られうるのは、ハインリヒが、エリナが書いているようなフランスの思想家の名前を挙げてはいないが、しばしばカント的な思想を表明していただけではなく、実際にカントの名前も挙げていたということである。

先にハインリヒがユダヤ的伝統に自己を強く結び付けていたことをみてきたのであるが、誰しも考えてみたくなるのは、それにもかかわらず、仮に強制の結果として外面的なものでしかなかったとしても改宗できたということは、それを可能にした内面的な経緯もそれなりにあったのではないかということである。この点について検討するための資料があまりにも少ないために、僅かに推理してみる程度のことしかできないが、ともかくもカールへの手紙の文章などをみると、その通りであったのではないかと考えられることがわかる。それは、彼の宗教思想が理神論的傾向の強いものであったということであるが、その証拠は、ハインリヒが改宗してから20年近くも経ってから書いたカール宛の手紙のなかに見出される。そこでカールにたいして、相変わらず道徳的には立派だと褒めた後で、彼は次のように書いている。

「道徳の大きな梃子は、しかし、純粋な神にたすいる信仰だ。おまえも知ってのとおり、私はけっして狂信家ではない。だがこの信仰は人間にとっては、遅かれ早かれ、真の〔欲〕求であり、人生には、無神論者も〔心ならずも〕至高なるものの崇拜に引き入れられる瞬間があるのだ。それに、普通のことだが、誰もが、ニュートン、ロック、ライプニッツの信じたことに…従ってよいわけだから、…。」²²⁾

もしハインリヒが改宗時の1817～18年頃にもこのような宗教思想を持っていたとすれば、それが、外から強制された改宗をいっそう容易なものにしたことは、また、改宗によってこうした思想がいっそう強められたことも、十分に考えられるであろう。いずれにせよ、仮に外面的なものであったとしても、改宗を多少は容易にしたような内面的な事情もあったことは確かであったとみなしてもよいであろう。おそらく、カールの義弟のエドガー・フォン・ヴェストファーレンがハインリヒを「レッシング風のプロテスタント」と評していたという話

もこうしたことと関連していたのであろう。

さて、たしかにその通りであったとしても、こうしたことは推理できるだけであって、その結果がどの程度確かなことであったのかは確かめることができない。そして、以上でみてきたこととの関連においてよりいっそうはっきりしていることは、ハインリヒが神の信仰を「道德の大きな梃子」、つまり道德の支柱とみなしていたということである。改めていうまでもなく、これはまさに、ハインリヒがカントによって提起された新しい倫理学の方向を受け入れ、それによって自己を律していたことを示している。

後にカールが主張したように、カント哲学は「フランス革命にかんするドイツ的理論」であったとみなされうるであろう。まさにそのような理論としてカントの哲学がドイツの知識人たちのあいだで広く信奉者を見出してきたことは疑いがない。ハインリヒがいつ頃からこの信奉者の一人になったのは定かではないが、彼がかなり熱心な信奉者であり続けたことは、明らかであるように思われる。しばしば見過ごされているが、先に引用したカール宛の手紙の欄外追伸のなかで、ハインリヒは願望の成就と願望の価値低下、そうしたことと道德的原則との関わりなどについて述べながら、カントの『人間学』を引き合いに出している。彼がこの本をいつ頃読んだのかはわからないが、彼がそれをよく読み消化吸収していたことは確かである。しかし、よりいっそう重要なことは、ハインリヒが馴染んでいたのは、もとより、カントが論じていたさまざまな特殊的問題だけではなかったということである。カールに出した手紙を丁寧に読めば、彼が息子にたいする苦情や要求を細々と書き記しながら、ときどきまさにカント倫理学のエッセンスを念頭に置きながら息子に語りかけていたことがわかる。

その代表例は、すでに先に引用したことがある1837年春のカール宛の手紙のなかに見出される。そこで彼は、すでにカールと婚約していたイエニー・フォン・ヴェストファーレンについて簡単に触れた後に、続けて最初に次のように書いている。

「おまえが出世すること、いつかおまえの名前が大評判になるのをみたいと

いう甘い希望、またおまえの現世の幸せも、たんに私の深い関心であるばかりではなく、心の底に巣くった、長いあいだ培われてきた幻想だ。』²³⁾

一見世間的な意味での成功をカールの親も考え説こうとしていたのかと思われるような文章であるが、続けてハインリヒが書いているのは次のような文章である。

「しかし、これらの感情は、基本的には、大部分弱い人間のものであり、高慢、虚栄、エゴイズム等々のような、そのあたりにある一切の屑滓から純化されてはいない。だが、私はおまえに、それらの幻想の実現が私を幸せにすることはできないであろうと、断言することができる。おまえの心が純粋なものであり続け、純粋に人間的に鼓動し、どのようなデモーニッシュな天賦の才も、おまえの心がより良き感情を疎外するなどということがありえないような場合にのみ、ただそのような場合にのみ私は、ずっと以前から私がおまえを通して夢見てきた幸福を見出すであろう。さもないと、私は私の人生のもっとも美しい目標が崩壊させられるのをみることになるであろう。』²⁴⁾

さらに、少し後でハインリヒは、「私はおまえのうちにおいて永遠に人間を愛するであろう」と記し、そして自分は実際的な人間であるが、「高いものや善いものにたいして鈍感になるほど、擦り減らされてはいない」と付け加えている。これらの文章は、ほかならぬ自分の分身のような存在に対してだけ書かれるような種類のものであるが、ハインリヒがまことによくできた父親であったことを伝えているとともに、彼がカント倫理学に馴染み、その教えるところにしがたって生きようと真剣に努めていたことも示している。こうした方向がいつ頃採用されたのかは、もとより定かではなく、カールによって煽られてそうなったのか否かも定かではないが、とにかくカント主義者のものであることは間違いないであろう。

さて、カントにあって人間性とならんで義務でもあるところの目的になるのは他の人々の幸福であるが、ハインリヒはこの点についても積極的に語っていた。しかし、何故かこの点について必ずしも適切に理解されてはこなかったように思われる。例えば、ハインリヒにはユダヤ人だけではなく一般市民のため

に寄与するというヒューマニズムを見られるのにたいして、カールの場合には全人類が強調され、やがてはプロレタリアートが強調されるということになる、つまり両者は自己の利害を超えた他の人々への献身ということでは共通していたが、しかし献身の対象の把握に相違があったなどということが語られている²⁵⁾。たしかにハインリヒがプロレタリアートについて語っていなかったことは事実であるが、しかし、人類についても同じであったのであろうか。もとより家族同士の手紙のやり取りのなかで全人類がテーマになる機会などは普通はあまりないであろう。そこでハインリヒがそうしたテーマについて少しでも語っていたとすれば、それをやはりそれなりに重く考えなければならない。

では、彼はどのような脈略で「人類」について語っていたのであろうか。カールがベルリンに移ってからまもない1836年11月9日の手紙のなかでハインリヒは、カールが「教養ある人たちのところに住みこみ、若い人たち、少なくともよく知らない人たちと付き合わない」のは結構なことだと書いた後で、次のように書いている。

「私がおまえに求めることは、ただ一つ、お前の体力を蓄え、そんなにもひどく弱まった資力を大切にすることだ。おまえはたくさんの重要な講義に登録した——たしかにおまえには大いに仕事をすべき理由があるが、精根を擦り減らしてはならない。おまえは、そうであって欲しいのだが、お前とお前の家族のために、また私の予想が間違いでなければ、人類の幸福（Wohl der Menschheit）のために、なお長いこと生きなければならないのだ。」²⁶⁾

最後の「人類の幸福」の部分から、ハインリヒの思想を十分に理解することができるかとみなしてもよいであろう。彼のところで「人類」は、先のそれぞれの人間のうちなる「人間」あるいは「人間性」とともに彼がカントから受け入れた彼の思想的財産の一つであったとみなすことができる。これは、カントの信奉者としては当然のことであって、彼が市民的権利の強調に止まっていて、「人類」については語っていなかったかのようにみなすのは、やはり根本的な誤解にはかならないのである。

後にカールはヘーゲル主義に自己を結びつけていくが、そのさいに過去を顧

みながら、これまでの自分はカント的およびフィヒテ的な思想を抱いていたと総括している。カールは父親の影響を強く受けながらカントの思想を吸収し、フィヒテがそうしたように、それをいっそうラディカルにして行ったとみなすことができるのであるが、しかしそうしたことを確認するためには、カールのアビトゥーア論文を立ち入って検討してみなければならない。

おわりに

カール・マルクスが幼少年時代にどのように両親のもとで育てられたのかを検討してきたのであるが、これまで必ずしも十分に注目されてきたとはいえないことの一つは、彼が両親を通じてユダヤ的伝統に密接に結びつけられていたということであった。この伝統がどれほど優れた思想を発展させてきていたかということ、ここでも母親のヘンリエッテの手紙などを通してみてきたのであるが、この伝統についてアインシュタインは一般的に次のように語っていた。

「われわれのもろもろの抱負や判断の最高の原理は、われわれにユダヤ教的・キリスト教的な宗教的伝統のなかにあたえられている。それは、われわれの弱い力をもってしては、ただ非常に不適切にしか到達することができないが、しかし、われわれのもろもろの抱負や評価の確実な基礎をあたえる非常に高い目標である。もしその目標をその宗教的形式から取りだして、その純粋に人間的な側面に目を向けることができるとすれば、おそらくそれを次のように述べることができるであろう。すなわち、個人の自由な、そして責任ある発展、そうすれば、その個人は彼の力を自由に、そして喜んで、すべての人類に奉仕するために使用するであろう。」²⁷⁾

もしこのアインシュタインの主張が正当であるとすれば、ユダヤ教およびキリスト教の伝統と結びついていた者は、近代の啓蒙主義やカント思想を受け入れるのがけっして困難であったわけではなかった、というよりは、むしろそれらの思想を受け入れやすかったということになるであろう。おそらくそうした理由もあって、すでにカント思想を受容していた父親の影響の下で、カールも

かなり早くからカントやフィヒテの思想を受け入れ発展させていたはずである。こうしたことは、カールのアビトゥーア論文に表明されている思想を検討してみれば、その通りであったことがよくわかる。たしかにそれらの論文にはカールの最初の思想的マニフェストとみなされるべきものもあれば、それと矛盾した立場が表明されているものもあって、まだ必ずしも首尾一貫していたわけではない。しかし、それにもかかわらず、彼がこの時期に、後に彼が総括しているような哲学的パラダイムに到達していたことはかなりはっきりしている。このパラダイムを抱いてボン大学に入学したカールは、法学や歴史学を勉強するとともに、しばらくのあいだ詩作に耽るが、やがてベルリン大学に移ってまもなくこのパラダイムを乗り越えて、当時の最先端の思想であったヘーゲル左派の思想に自己を結びつけていく——この転換の過程については、筆者はすでに『初期マルクスの批判哲学』のなかで分析している——。そこで、ヘーゲル主義に到達するまでにマルクスが書いたアビトゥーア論文や、これまであまり分析されていないかなりの量の詩を立ち入って検討しなければならないのであるが、それはまた改めて本論文の続編としてまとめられることになるはずである。

注

- 1) マルクスの両親や彼らの家系についての研究がハインツ・モンツなどによっておこなわれてきているが、さしあたってここでは彼の前掲著書〔拙稿「トリーアとマルクス」参照、『文学部論叢』所収〕の第三部を参照されたい。日本の研究者のものでは次の研究書が詳細な分析を含んでいて優れている。的場昭弘『トリーアの社会史——カール・マルクスとその背景』、1986年、未来社。
- 2) フランツ・メーリング『マルクス伝』1、栗原佑訳、国民文庫、37ページ。
- 3) David McLellan: "Karl Marx. His Life and Thought". p. 5. 前掲邦訳、4ページ。
- 4) Heinrich Marx und Henriette Marx an Karl Marx in Bonn. Trier, 18.-29. November. In: Marx Engels Gesamtausgabe. III-1, S. 292. 邦訳、『マルクス エンゲルス全集』第40巻、大月書店、546-47ページ。
- 5) Heinrich Marx und Henriette Marx an Karl Marx in Bonn. Trier, Februar-Anfang März 1836. In: MEGA. III-1, S. 294-295. 邦訳、同前、550ページ。
- 6) シーセル・ロス『ユダヤ人の歴史』、みすず書房、154-55ページ参照。

- 7) Heinrich Marx und Henriette Marx an Karl Marx in Bonn. Trier, Februar-Anfang März 1836. In:MEGA. III-1, S. 293. 邦訳, 前掲『マルクス エンゲルス全集』第40巻, 547ページ。
- 8) Heinrich Marx und Henriette Marx an Karl Marx in Berlin. Trier, 16. September 1837. In:MEGA. III-1, S. 320. 邦訳, 『マルクス エンゲルス全集』補巻1, 548ページ。
- 9) このような考え方をハインツ・モンツなどは「ユダヤ的知性」の特徴としてとらえている。彼の前掲書参照。
- 10) この文章は, 学生時代のマルクが書いた手紙で保存されている唯一の手紙を公表するさいに, 娘のエリナ (Eleanor Marx-Aveling) が1897年に書いたまえおきのなかに含まれている。Marx Engels Werke. Ergänzungsband. S. 661. 邦訳, 全集第40巻, 589ページ。
- 11) 前掲的場昭弘『トリーアの社会史』, 329ページ参照。
- 12) モンツの前掲著書からの重引。Heinz Monz: "Gerechtigkeit bei Karl Marx und in der Hebräischen Bibel". S. 130.
- 13) Ebenda, S. 131.
- 14) Ebenda, S.131-137.
- 15) 前掲メーリング『マルクス伝』1, 39ページ。
- 16) ハインリヒ・ゲムコー編『カール・マルクス 伝記』(1967年), 坂井信義訳, 大月書店, 1969年, 14ページ。
- 17) David Mclellan: "Karl Marx.His Life and Thought". p. 4. 邦訳マクレラン前掲書, 3ページ。
- 18) Heinz Monz: "Gerechtigkeit bei Marx und in Hebräischen Bibel". S. 134.
- 19) Ebenda.
- 20) Reminiscences of Marx and Engels. Moscow, p. 130.
- 21) Heinrich Marx an Karl Marx in Berlin. Trier, 2. März 1837. In:MEGA. III-1, S. 310. 邦訳, 前掲『マルクス エンゲルス全集』第40巻, 557ページ。
- 22) Heinrich Marx und Henriette Marx an Karl Marx in Bonn. In:MEGA. III-1, S. 291. 邦訳, 同前, 544ページ。
- 23) Heinrich Marx an Karl Marx in Berlin. Trier, 2. März. In:MEGA. III-1, S. 308. 邦訳, 同前, 555ページ。
- 24) Ebenda, S. 308-09. 邦訳, 同前。
- 25) 例えば, 前掲的場昭弘『トリーアの社会史』, 342ページ。
- 26) Heinrich Marx an Karl Marx in Berlin. In:MEGA. III-1, S. 300-01. 邦訳,

『マルクス エンゲルス全集』補巻1, 533ページ。

27) Albert Einstein: "Out of My Later Years". p. 21. 邦訳, 前掲アインシュタイン『晩年に想う』, 41ページ。

付 記

《文学部論叢》前号所収の「トーリアとマルクス」に誤記がありましたので, 次のように訂正します。

70頁11行目

「ハインリヒ・マルクスが生まれてしばらくして」→「ハインリヒ・マルクスが生まれる少しまえに」